

洞窟教会壁画の現状と美術史的考察 Ⅱ

宮下孝晴^{*1,*2}・宮下睦代^{*2}

Condition of Mural Paintings in Cave Churches and Art Historical Consideration

Takaharu Miyashita^{*1,*2} and Mutsuyo Miyashita^{*2}

Our survey in September 2012 was held in three cave churches in south Italy: Chiesa in localita Gravina di Riggio est and Chiesa di Casa Vestita in Grottaglie, and Chiesa di San Nicola in Palagianello. In each church, we described the conditions and consideration of mural paintings and architectures from the viewpoint of art history based on documents investigation and simple distance measurement.

Key Words: mural painting, middle ages, cave-church, South Italy, conservation

キーワード: 壁画, 中世, 洞窟教会, 南イタリア, 保存

1. ヴェスティータ家で近年発見された教会

1.1 グロッターリエについて

港町ターラントから東へ 17km に位置するグロッターリエ (Grottaglie) は、ムルジャ丘陵地帯の最も低い標高 130m の斜面に広がっている。人口およそ 35,000 人が暮らす現在の市街地は南北に発展しているが、その西側の一角に中世の歴史を残す旧市街地がある。グロッターリエの名は「グロッタ」(grotta: 洞窟) に由来する。周辺を走る幾筋もの峡谷 (Grotta di Riggio, Fantaiano, Pensieri, Foranese) の洞窟に住んでいた人々が 10 世紀の後半に集まってきて、ここに最初の都市を形成したようである。旧市街地の中心であるマルグリータ女王広場 (Piazza Regina Margherita) に建つ教会 (Chiesa Matrice) の建設が 11 世紀末から 12 世紀の初めにさかのぼるという事実は、都市の形成が 10 世紀の後半であったことを裏付けている。教会はその後何度かの増改築を受けてはいるが、ファサードを飾る彫刻には今もなおロマネスク様式の痕跡を確認することができる。14 世紀にはクリスピ通り (Via Crispi) の高台に、城郭のように堅固なカステッロ・エピスコーピオ (ターラントの司教館: 現在は陶器博物館) が建設されている。

都市の形成を促した産業が陶器産業であったかどうかは定かではないが、旧市街地には今も陶器店がずらりと軒を連ねるイタリア有数の陶芸産業の盛んな地である。そして、陶芸産業の歴史は古く、ギリシアの陶片が発見されていることから古代ギリシア時代にまでさかのぼる可能性すらあるという。少なくとも、このあたりの凝灰岩の下にある陶芸に適した良質の粘土を

使って、中世には洞窟内で陶器製造が盛んに行われていたことが確認されている。

旧市街地の近くを走るフッロネーゼ峡谷 (Gravina Fullonese) には数多くの洞窟があり、10 世紀から 11 世紀にかけては、フッロネーゼ峡谷沿いにヘブライ人が住んでなめし革を生業としていた記録もある。外敵や蛮族の侵略などに際して、このような峡谷の洞窟は格好の隠れ家として、いつの時代にも利用されたであろう。また、8 世紀から 9 世紀にかけてのイコノクラスム (聖画像破壊運動) の嵐を避けてビザンティン帝国から移ってきた修道士たちが、祈りと修行の場として洞窟に壁画を描いて礼拝堂としたことは、ここグロッターリエだけに限ったことではない。

1.2 建築に対する考察

陶芸家のコジモ・ヴェスティータ (Cosimo Vestita) 氏の自宅 (Fig.1) は、旧市街地の南東にあるクリスピ通りにある。クリスピ通りはかつてサン・ジョルジョ峡谷 (Gravina di S.Giorgio) だったところで、今でも曲がりくねった道の両側は急な斜面となっていて、昔は峡谷に面した断崖であったことを物語る地形である。中世には、このサン・ジョルジョ峡谷の谷間に沿っていくつもの洞窟があり、陶芸業が営まれていた。16 - 17 世紀、峡谷の縁に沿って築かれた市壁の近く、現在のヴェスティータ家のあたりは大きな陶芸工房が存在していた。つづく 18 世紀半ば、市壁が壊された際に、そのあたりの (峡谷の崖や市壁を利用して建てられていた) 建造物は大きく改築されることとなった。実際には峡谷の崖を穿って建設されていた半洞窟の建造物を外側から凝灰岩を積み上げて被覆し、手前に張り出させることで、旧建造物を補強しながら居住空間を拡張したのである。このあたり一帯は現在、陶器製造地区 (Quartiere delle Ceramiche) と呼ばれ、多くの陶器店や工房、陶器工場が集まっている。

*1 人間社会研究域 歴史言語文化学系

*2 フレスコ壁画研究センター

*1 Institute of Human and Social Sciences, Faculty of Letters

*2 Research Center of Italian Mural Paintings

陶芸家のコジモ・ヴェスティータ氏は、数年前に旧市街地のクリスピ通りに面した古い建造物を購入し、そこを自邸兼展示ギャラリーとすべく建造物の改築と（クリスピ通りから入って自邸に至るゆるい斜面を利用した）古代風の庭園（Fig.2）の整備に着手した。庭の東側の隅に土砂を詰めた横穴があり、それを掘り出して取り除いたところ、1部は壊れていたものの、ほとんど使われた形跡のない中世に作られた調理用の大窯が見つかった。自宅で使うには大きすぎるといふことで、その窯も取りのけたところ、背後から3聖人の壁画が壁龕に描かれた礼拝堂（Fig.3）が発見された。それが2008年のことであった。

中世、ここも凝灰岩の峡谷斜面を掘り抜いて建設された教会（ないしは礼拝堂）であったが、やがて教会としての機能を失い、民家の1部として組み入れられた。壁画の描かれた空間が調理用の大窯で意図的に隠されたのかどうかは、知るよしもない。中からは同教会内の中央壁龕（ニッチ）に描かれた「パントクラトールのキリスト」を写したと思われるブロンズ製プレート（Fig.4）、ギリシア語で刻字のある十字架のブロンズ製胸飾り、8枚のコインが発見された。コインのうちの2枚は十字軍のもので、これが1290 - 1321年間の製造と判断されたことから、同教会の建設も13世紀末から14世紀初め頃のことであったと考えられている¹。ブロンズ製の浮き出しプレートに見られるキリスト像は、左手に聖書を持ち、右手の人差し指と中指の2本を立てて祝福を与える姿といい、螺旋円柱や円光に刻まれた十字装飾についても、同教会内の中央壁龕（ニッチ）に描かれた「パントクラトールのキリスト」を写したかのように酷似していて興味深い。キリストを包む衣服の表現だけが異なるが、小型のブロンズ製プレートではあえて衣服を簡略化したとも考えられる。

この教会は発見後まもないため、まだ歴史的ないしは図像学的な研究が進展しておらず、正式な教会名は定まっていない。とりあえず、現在の所有者にちなんで「ヴェスティータ家の教会」と呼ばれている。教会堂内へは、ヴェスティータ家の庭園の東隅にある金属製の扉（Fig.5）を開け、10段の階段を下りる。堂内（Fig.3,6）はシンプルな構造で、空間を支える柱はなく、したがって柱列による空間分割はない。奥の東北東の壁面に、後陣として3つの連続する壁龕（ニッチ）があり、螺旋状の刻みの入った付け柱の円柱4本がそれぞれを仕切っている。そして、ちょうど中央壁龕の上にあたる傾斜した岩盤天井には、浮き出した円形枠の中に同じく浮き彫りのギリシア十字 \oplus が刻まれている。

現在は長軸に対して直角の階段を下りて入るが、教会として機能していた頃の建築プランも今と同じようであった可能性は高い。現在の階段を6段下りた位置の左側壁に螺旋円柱のように刻みが彫り込まれた付け柱（Fig.7）があり、そこが往時の洞窟教会入口であったことを暗示する。そのすぐ先の左手に掘られた小壁龕（Fig.8）には、水を吸って成長する樹木（生命の木）をモチーフとした象徴的な絵が描かれていることから、聖水盤が埋め込まれていたと考えられる。図柄は中央から7枝に分かれ、ユダヤ教の燭台（メノラ）を思わせないではないが、ここでは聖水盤との関係から「生命の木」と解釈すべきであろう。結論として、掘り抜かれた洞窟教会の凝灰岩塊の基本構造や、

周囲の壁面（Fig.9,10）に穿たれた小壁龕や格子状に掘られた岩棚の位置などからして、往時も現在とほぼ同様のプランであったと推論する。また、この礼拝空間の形式はターラントやレッチェ地方に多く見られることも、それを裏付ける。

ヴェスティータ家が自邸としている（日本式呼称でいう）1階部分も、もともとは凝灰岩を奥に掘り抜いており、上階の雨水を集めて引き込んだ大きな3つの円錐型の貯水槽（室）を回廊のような水路で連結した貯水システム（Fig.11）も発見されている。それらの貯水槽（室）にも発見当時は膨大な量の陶片や水がたまっていたが、それらもすべて取り除き、現在は陶芸作品の展示ギャラリーとして活用している。なお、こうした例はヴェスティータ家に限ったことではない。近くの陶器店（Enza Fasano）を案内してもらったが、店の奥の方の空間はすべて凝灰岩を掘り抜いた洞窟部分で、昔の礼拝堂を改築したらしいシヨールームには、明らかに聖人を描いたビザンティン風の壁画断片が残っていた。

1.3 壁画に対する考察

まだ十分な研究が進んでいないことを前提としてではあるが、壁画の様式はグロッターリエがターラント領であった13世紀頃のプーリア地方の画家の特徴を示している。東北東に設けられた3つの後陣に描かれているのは、パリア大学のアンジェロファビオ・アットーリコ教授（Prof. Angelofabio Attolico）の研究によると、左側から「聖ニコラウス」（Fig.12）、左手に開いた聖書を持って祝福を与える「パントクラトールのキリスト」（Fig.13）、「聖女バルバラ」（Fig.14）とされる。しかし、壁画中に聖人名を示す文字の記載はなく、筆者の見限り、決定的な図像学的根拠は見当たらない。上述したように、中央壁龕の上方に位置する天井部分には、浮き出した円形枠の中に同じく浮き彫りのギリシア十字 \oplus が刻まれているだけでなく、床面も一段高くなっている。

螺旋円柱のように刻みが彫り込まれた付け柱によって仕切られた各壁龕のサイズ（高さ・幅・奥行き）は、左側の「聖ニコラウス」：109.5cm・69.2cm・42.3cm、中央の「パントクラトールのキリスト」：139.4cm・72.3cm・46.6cm、右側の「聖女バルバラ」：112.4cm・70.5cm・29.1cmである。

壁龕の内側の輪郭を縁取る赤い帯状枠、赤線枠の内側に沿って細い白線の縁取りがある。ただし、中央壁龕のみ、その内側にさらに連続する白点で装飾的なアクセントがつけられている。この連続白点は見る者に「ほとぼしる生命エネルギーの象徴」を感じさせ、前述した聖水盤を埋め込んだ小壁龕に描かれた「生命の木」にも同様の表現が施されている。

壁龕内に描かれた聖人像のサイズはキリストがもっとも大きく、頭部1つ分だけ上方に位置しており、他の聖人に比して膝上あたりまで描かれている。さらにキリストが描かれている中央壁龕には、両サイドを削って掘り残した祭壇があるが、その削られた部分にも壁画が描かれているため、キリストの膝のあたりは祭壇の上板の背後に隠されているかのように見える。さらに、祝福を与える右手や左手に持つ聖書も赤い帯状枠の上に描かれて壁龕の空間を限界まで無駄なく利用しているため、キリスト像の存在は視覚的にいっそう大きく感じられる。キリス

トが右手の5本の指を(親指まで)すべてこちらに見せて持つ開かれた聖書には「我は世界を照らす光なり」"EGO SVM LUX MVNDI"と『ヨハネによる福音書』(第1章)中の言葉がラテン語で書かれている。また、キリストの下半身部分には聖体拝受用の杯などの聖具を置くための、ひときわ美しく装飾された小壁龕が穿たれ、奥には山吹色の背景に赤い十字架(ラテン十字形)が描かれている。

キリストを含む聖人像は壁龕内の奥の壁面周囲を縁取る赤い帯状枠の中に、(やや青みがかって見える)黒色を背景として描かれている。ただし、金箔貼りの代用である山吹色の円盤として描かれた円光(ニンプス)は壁龕上端の赤い帯状枠の上に重ねられ、キリストの場合には壁龕を突き抜けてしまっている。円光の山吹色に塗られた色調と円周を縁取る連続白点は3つとも同じであるが、円光内の装飾はそれぞれ異なる。「聖ニコラウス」が戴く円光は山吹色1色で、一切の装飾はない。「パントクラトールのキリスト」の円光は、山吹色の地色に縁取りの赤色帯と同じ赤色の十字装飾がある。山吹色の地色に輝く宝石を円環状に散りばめた「聖女バルバラ」の円光は、彼女のまわっている美しい縁取りのあるマントともよく似合う、女性らしいデザインになっている。ところで、「聖女バルバラ」の描かれた壁龕の右側は側壁にかけて(理由は不明だが)3分の1ほど崩れており、崩れた奥は部分的に空洞になっているようである。

2012年1月に本センターが実施した予備調査の際、左側の壁龕内に描かれている「聖ニコラウス」の目の周囲から顎髭、口元のあたりに、漆喰がまだ生乾きのうちに鋭い刃物でつけられた刻線(incisione:インチジョーネ)があることを、斜光線を照射した調査で初めて発見した(Fig.15)。ただ、この刻線を一般に壁画用語として使われている「インチジョーネ」と呼ぶのは正しくないであろう。つまり、壁画用語として使われている「インチジョーネ」とは、できるだけ正確な描写をするために、図柄の輪郭に沿って漆喰上に直接ニードルのような道具で引かれた刻線(incisione diretta:インチジョーネ・ディレッタ)であったり、原寸大で用意された下絵カルトーンの上からなぞって間接的に引かれる刻線(incisione indiretta:インチジョーネ・インディレッタ)という転写法だからである。

この「聖ニコラウス」の場合、(13世紀という時代を考えれば当然のことだが、15世紀に入って一般化される)下絵カルトーンが使われた形跡はなく、漆喰上に直接ニードルのような道具で引かれたインチジョーネ・ディレッタではあるが、聖人の輪郭を印そうとしたとも思えない。もしそうであるなら、顔の輪郭、鼻筋や両耳の位置、肩の線などが引かれているはずである。ちなみに、この壁面上の刻線については3Dスキャン(Range5)によっても徹底的に調査した(Fig.16)が、他の2つの壁龕においては「聖ニコラウス」のような刻線はまったく発見できなかった。したがって、描写にあたって、デッサンを間違えないようあらかじめ聖人の輪郭を印そうとしたとは考えにくいのである。それとはまったく違う目的があったと仮定して、さらに考察を深めなければならない。キリストの髪や顎髭は黒褐色なので、明るい色で容易にハイライトをつけて陰影やリアルな質感を出すことができるが、白い顎髭に白髪は聖ニコラウスの場合には、全体が灰色にぼやけてしまっている

ような視覚的効果が出せなかったのではないと思われる。そうした時に(細い描線に代わる)刻線を施して、実際の陰影の助けを借りてリアルな質感を出そうとしたのではないだろうか。現在の壁龕では上に小さな照明が組み込まれているが、本来なら祭壇の上に灯明が灯されて、聖人像は下方から照明されたはずである。当時のように下方から照明を当ててみると、まさにそれは斜光線調査の状態と同じで、壁面の凹凸が誇張されて口元や顎髭はリアルな陰影効果を発揮する。

ところで、この小さな3つの壁龕に3人の聖画像を描くのに、多くの手は入っていないと筆者は考えている。つまり、3つの壁龕に描かれた壁画の様式的統一性や絵画としての質的均一性からして、師匠格の画家が中央のキリストを担当し、両側の2聖人を弟子か助手が担当したということではなく、ここは1人の画家(修道士)の手ですべてが描かれたと判断する。したがって、弟子がうまく陰影効果を出せないでいる聖ニコラウスに師匠が「魔法の刻線」を引いて救済したわけではない。

それにしても、漆喰がまだ十分に乾ききらない、つまり硬化しきらないうちに、描写の途中で鋭い刃物を用いてつけられた漆喰上の痕跡としての刻みは、漆喰が完全に乾いて硬化してから(卵黄などをメディウムとした)テンペラ画法で描かれていたであろうという推論を根底から覆すことになった。明らかに「聖ニコラウス」に見られる刻線は、その周囲の観察(バリなどの具合)から、漆喰が乾ききらないうちに付けられたものと判断されるからである。壁画面の顕微鏡観察でも、刻線の上から彩色描写されていることが確認されているので、少なくとも「聖ニコラウス」の描写に関するかぎりは、漆喰が生乾きのうちに描写を開始していることになる。それがどのような技法であったか定かではないが、「生乾きの漆喰を利用」している点で、フレスコ画法に大きく1歩近づいていると言えるのではないだろうか。そして、この貴重な作例が古くから陶芸産業の盛んなグロッターリエの地で発見されたことに、筆者は必然的な意味を感じずにはいられない。まだ十分な調査データがそろわないが、生乾きの漆喰を利用するフレスコ画法と、成形した粘土を窯で焼成する陶芸技法との間には必ずや密接な関係があるという方向で、今後の調査も進めていきたい。グロッターリエの特徴的な陶芸技法に、「聖ニコラウス」に見られた刻線タッチを生かしたのものがあることは事実である。

1.4 壁画保存の状況

発見されて間もないということ、所有者が(文化財保存に対する専門的な見識があるわけではないが)陶芸作家としての見地から、個人としては可能な限りの保存管理に努力しているため、壁画の保存状態はきわめて良好である。後陣の壁龕に描かれた壁面に関しては描画層の剥落もなく、全体にわたって彩色も非常によく残っている。

ただ、金属製の扉で地下に密閉された空間ということもあって、湿度は非常に高い。国立フィレンツェ修復研究所のアドバイスで、現在は除湿器をフル稼働させ、1日に9リットルもの水がタンクにたまるという。

2. グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会

2.1 グラヴィーナ・ディ・リッジョについて

次なる調査地は、グロッターリエから約40km北西のところにあるグラヴィーナ・ディ・リッジョ (Gravina di Riggio). その名の示す通り、そこは凝灰岩台地を深くえぐって形成されたリッジョ峡谷 (グラヴィーナ・ディ・リッジョ) (Fig.17) だが、峡谷を見下ろす高台では山羊や羊の牧畜の他、ブドウやオリーブなどを栽培している。この峡谷にある「リッジョ東」と呼ばれている洞窟教会を所有するマッジ農園のトンマーゾさんとローザさん夫妻は、「我が家は子供7人、孫15人、羊22匹、豚4匹、犬9匹、猫2匹」と家族構成を自慢げに語った。

リッジョ峡谷は南北方向に正弦曲線を1kmほど描いて走る深い峡谷で、普段は小さな溪流だが、いったん雨が降ると溪流は嘘だったかのように豊富な水流となり、幾筋かの滝まで現れる (Fig.18)²。峡谷兩岸の凝灰岩段丘には多くの洞窟があり、先史時代 (紀元前16-11世紀) から人々がここに住んでいた痕跡が考古学の発掘調査で確認されている。古代においても、自然洞窟や簡単に掘削できる人工の洞窟は、貯水槽や穀物貯蔵庫、あるいは納屋や家畜小屋として利用された。中世になって、少なくとも壁画の描かれた2つの洞窟教会 (リッジョ東教会とリッジョ西教会) が建設され、その近くの洞窟群には修士や村人がともに生活を営んだ共同体が存在していた。墓地も発見されている。

2.2 建築に対する考察

「グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会」 (Fig.19) は、リッジョ峡谷に面した東側の急斜面を掘り抜いた教会である。ただし、「グラヴィーナ・ディ・リッジョ東」という教会名が定着しているわけではなく、「サン・サルヴァトーレ教会」であるという説や「マッジョーレ教会」と呼ぶ研究者もいる。³ここではプーリア州文化財監督局が出している中世洞窟教会リスト⁴の Chiesa rupestre in localita Gravina di Riggio est (グラヴィーナ・ディ・リッジョ東地区にある洞窟教会) にもとづき、「グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会」と呼ぶことにする。つまり、祀られた聖人名や地名を冠した歴史的伝統によるのではなく、リッジョ峡谷を挟んで東西に向かい合った2つの洞窟教会が存在したという事実から、便宜的に「東教会」と「西教会」に振り分けたというにすぎない。今後、歴史的かつ壁画の図像学的研究が進めば、往時の人々に親しまれた本来の教会名が浮かび上がってくるかもしれない。だが、洞窟教会の惨憺たる現状を見るかぎり、また洞窟教会の存在そのものが地元の人々の記憶から消えかけていることから、研究の進展はますます困難をきわめることであろう。なお、「グラヴィーナ・ディ・リッジョ西教会」の存在はプーリア州文化財監督局が出している中世洞窟教会リストにはあるものの、地元の人々の間でも曖昧で、短期間の調査ではその正確な位置すら確認できなかった。

さて、マッジ農園の所有地内にある「グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会」であるが、ここは農家の裏手から急な斜面を下りた崖の中腹、谷底との中間に位置する。峡谷に面した教会のファサード部分は大きく崩落し、大きな長方形 (幅約7m、

奥行き約5m、高さ約3.5m) の穴がぽっかりと開いている (Fig.19,20)。あるいは、いずれかの時代に、放牧している山羊や羊の休息地として洞窟を利用すべく、広い開口部を望んだ地元の農民たちによって、故意にファサード壁が崩されたという可能性もある。また、教会に向かって右側にも、住居跡ではないかと思われる大きな洞窟 (Fig.21) が口を開けているが、これも教会の場合と同じく、玄関ファサード部分の壁が大きく崩落して内部空間をさらけ出した結果である。

ただ、現存しない教会の西側ファサードであるが、ファサード壁の痕跡がまったく残っていないわけではない。教会ファサードにあたる中央上部には (一般には半月形アーチとされているが、筆者の判断では) 四角い窓があったと推測させ、床面には中央入口扉の部分を除く左右に、かつてのファサード壁の名残が確認できる (Fig.20)。また、ファサードの上方、左右の隅にも、換気や採光のために設けられごく小さな (縦長) 長方形の開口部が現存する (Fig.19,20)。ここまで荒廃した教会堂内の構造を再現することは容易ではないが、同内に残された痕跡から考察を進めてみよう。

洞窟の開口部から東 (正確には東北東) に向けた突き当たりの壁面 (Fig.22) に後陣があり、少し大きめの中央後陣と (向かって) 右側の後陣には、傷みの激しい壁画がかろうじて残っている。全壁面を3等分し、中央の後陣を少し大きめにデザインした設計バランスからして、この東壁には3つの削り型後陣を並べようとしたのではないと思われる。中央後陣の左側壁には、ちょうど右後陣の祭壇の上端と同じ高さに、横1列に並んで穿たれた鑿跡が7箇所 (Fig.23) みられ、これが左側の後陣を掘り抜く最初の印だと考えられている。⁵これを根拠とすれば、左側の後陣の大きさも右後陣とほぼ同じサイズが予定されていたことになる。しかし、(向かって) 左側の削り型後陣が、それ以上掘り抜かれようとした形跡はなく、その壁面には壁画が描かれている。また、左右の側壁下に設けられた (実際には、壁面を作る際に掘り残しておいた) 腰掛け台 (panchina) も、ここまで伸びてきている。当初の計画では3つの削り型後陣を考えていたことは事実だが、実際には2つの削り型後陣だけで十分に教会の典礼機能を果たせたことから、3つめの削り型後陣の建設計画が実施されることはなくなったのではないかと想像する。つまり、すでに定説化しているように「後陣部分は未完成で終わった」のではなく、3つめを建設する実際の必要性が認められなかったために、かなり早い時期から計画変更され、その壁面には壁画が描かれることとなったものと筆者は考えている。

東壁の2つの削り型後陣には (後陣を削りぬいた時にあらかじめ掘り残した) 直方体の祭壇が設けられていたはずであるが、なぜか中央後陣の祭壇はなく、(向かって) 右側の削り型後陣の祭壇のみ現存している (Fig.22)。そして、東面の床は後陣の手前まで、堂内の床面より1段高くなっている。さらに内陣空間を仕切るビザンティンの教会建築に特有のイコノスタシスが設けられていたようで、おそらくは木製の柵を左右の側壁の窪みにはめ込んで設置したらしい痕跡が残っている (Fig.24)。また、左右の側壁にはいかにも無造作に小壁龕がいくつも掘られ (Fig.25)、右側の南側面 (Fig.26) では壁画を破壊して小壁龕

が設けられているが、これらは壁画の描かれた時代よりもずっと後のものである。

なお、教会の天井のほぼ中央部分に、ドリルで掘削したような直径80cmの穴(Fig.27)が垂直に約2m上の崖上まで突き抜けているが、この(教会堂建設とは無関係な)穴がいつ何の目的で開けられたかは不明である。それほど今から遠くない時代、この洞窟教会のスペースを納屋か貯蔵庫として利用していた農民が、崖下の入口まで苦勞して回り込まずに、崖の上からロープで何かを引き上げるため、あるいは逆に、上から下の貯蔵庫に収穫物などを落とし込むために開けた可能性が高いと筆者は考えている。

2.3 壁画に対する考察

崩落して消失したファサード裏の西側については不明だが、東、北、南の各壁面には壁画が描かれていたと考えられる。しかし、堂内全体の壁画プログラムを考察できるほど現存しているわけではない。壁面ごとに現在の観察による分析と、20-30年前にはまだ観察できた壁画を記述している先行研究⁶を参考に考察を進めていこう。

【東面】

教会に入って正面の東壁の壁画(Fig.22)がもっとも古く、2層に塗り重ねられた(より年代の古い)下層漆喰上の壁画は10世紀後半と推定される。この重層して塗られた壁画が剥落によって、現状では上層と下層が混在しているために図像プログラムの判読はいつそう困難をきわめている。向かって左側の後陣(Fig.28)に描かれているのは、プーリア地方でもっとも古い「デエシス」の壁画と言われ、中央に「キリスト」、左に「聖母マリア」、右に「洗礼者聖ヨハネ」(現状では判読不可能)が描かれている。

向かって右側の後陣(Fig.29)には両手を開いた「祈りの聖母マリア」、その左側にはギリシア語の記載から「聖アンデレ」、鍵が見られることから「聖ペテロ」、右側には髯をはやし螺旋状の杖を持った聖人(?)と、鮮やかな色彩の聖人(?)が描かれている。現在は2聖人を図像学的に特定することは不可能であるが、先行研究では「洗礼者聖ヨハネと聖パウロ」とされている。先行研究とは、グロッターリエの都市学部門が2007年に編纂した「テーマ別地域都市計画・景観 考古学的文化財リスト」("Elenco Beni Archeologici", Piano Urbanistico Territoriale Tematico / Paesaggio)⁷である。同リストには、グロッターリエに残る290の洞窟が掲載され、そのNo.27がChiesa Maggiore、つまりグラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会である。そこには1961年⁸、1981年⁹、1995年¹⁰の参考文献をもとに作成した解説が付され、その記述によれば、「祈りの聖母マリアの左側に聖アンデレと聖ペテロ、右側に洗礼者聖ヨハネと聖パウロ」と特定されているのである。

向かって左側の後陣の上(Fig.30)には、先行研究¹¹では聖ゲオルギウス、赤い円内には白い鳩のような鳥が描かれていたと記されているが、壁画の現状からは肯定も否定もできない。その右側には旧約聖書の「預言者エリヤの昇天」(Fig.31)で、燃えさかる火の車に乗って天に昇っていく途中でエリヤの身から落ちたマントを手取るエリヤが描かれている。さらに右

方、南側壁に近いところに聖女バルバラと思われる聖女像が確認できる(Fig.32)。花柄装飾モチーフの衣装を着た2人の聖人は、先行研究¹²による「奥の壁面には聖女バルバラと名前のわからない聖人」に該当するであろう。同じ壁面の左上方、つまり北側壁に近い角には2層構造の上層壁に「磔刑」(Fig.33)が描かれており、現在では「磔刑図」の大半は消失しているが、アダムの頭蓋骨の上に並べたキリストの釘打たれた両足のあたりの断片が残っている。

なお、後陣の半円アーチ部分の装飾は赤と青の2色による幾何学模様(左)と植物模様(右)で彩られている(Fig.34)。

【南面】

南壁面(Fig.26)は、先行研究¹³に従えば11世紀前半に描かれた壁画で、現状を観察するに限り、壁画の2層構造は発見できない。東側の奥、上方の角から始まる赤い帯状枠で縁取られた長方形の空間には、「居並ぶ7人の司教」(Fig.35)が描かれている。横1列に直立して並んだ(肩幅の狭いスリムな体型の)司教たちは、司教服に身を包み、それぞれ左手に同じような聖書を持って、右手の指二本(人差し指と中指)を立てるラテン式の祝福を与えている。¹⁴

その下の赤い帯状枠の中には、肩越しに美しく大きな翼を見せる正面向きの「大天使聖ミカエル」(Fig.36)が、右手で小さな十字架を掲げ、左手で球を示す姿で描かれており、上部にギリシア語でも記載がある。

なお、「居並ぶ7人の司教」が描かれているすぐ右に残る壁画断片(赤色の帯状フレームなどの一部)を観察すると、赤い帯状フレームの垂直線に沿って墨縄の(細い縄をよった)縄目を押し当てた痕跡が漆喰上に残っており、このことから水平や垂直などの画面の枠線位置を割り出して漆喰上に印す場合には、漆喰を塗ってまもない生乾きの段階に行ったことがわかる。また、「居並ぶ7人の司教」とそのすぐ下に描かれた「大天使聖ミカエル」の境目にあたる水平の赤い帯状枠を観察すると、この枠線のところで漆喰を塗り継いだ鏝跡が明らかとなった(Fig.37)。上下に描かれた壁画が同時期の制作だとすれば、(色調の統一性などから、その可能性は高いと思われるが、)壁面全体にあらかじめ(均一に)漆喰モルタルを塗っておいてから壁画制作に取り組むのではなく、漆喰を塗り継ぎながら描写していたということになる。この点は、ポンタータ法やジョルナータ法などの漆喰塗り継ぎ作業を基本として生乾きの漆喰に描く「ブオン・フレスコ画法」のルーツを探る筆者らの調査においては、十分に検討する内容を含んでいる。

【北面】

北面(Fig.25)に残されている壁画断片は2箇所のみ。それは壁面中央あたりに(円光の一部かと思われる)黒い線で輪郭を描いた山吹色の断片と、右上方に残る少し大きな断片(Fig.38)である。後者の断片についても、主題やモチーフを追求する手がかりなどはなく、縦に引かれた赤い帯状枠と黒色、山吹色に塗られた漆喰が岩肌に辛うじてへばりついているだけである。ただし、前掲の「考古学的文化財リスト」によれば、そこには「左壁面にはエルサレム入城」の場面が描かれていたことになる。

2.4 壁画保存の状況

峡谷の谷斜面の中腹、テラス状の凝灰岩段丘の崖を掘削した洞窟教会正面のファサード壁が完全に崩落したため、室内空間は剥き出し状態である。そのため風通しがよく、湿気によるカビや苔などの被害は少ないが、室内に射し込む強い陽光、風雨、鳥などの生物には無防備で、重層して描かれた壁画の剥落や退色を早急に防止すべく、緊急の保存管理対策を講じる必要がある。

なお、前掲の「考古学的文化財リスト」にも「教会は構造についても、描かれた壁画についても、保存状況は最悪である」(Sia gli affreschi che le strutture della chiesa sono in pessimo stato di conservazione.)と記されている。

3. サン・ニコラ教会

3.1 パラジャネッロについて

港町ターラントの北西約 25 km に位置するパラジャネッロは、人口わずか 7800 人の小さな集落である。マテーラからグロッターリエにかけての一带は地理学上 "Arco ionico tarantino" と呼ばれ、凝灰岩台地を深くえぐる約 60 もの峡谷が密集する特徴的な地形で知られている。パラジャネッロ峡谷沿いの東の高台には、14 世紀に建設されたステッラ・カラッチョーロ伯爵の居城 (Castello Stella-Caracciolo) があり、そこを中心に市街が広がっている。

パラジャネッロ峡谷の凝灰岩段丘には、両側ともに多くの洞窟が現在まで残っている (Fig.39)。洞窟住居が密集していた峡谷の東側は、近年、歴史散策の遊歩道として整備された。遊歩道沿いの洞窟住居群には、往時の生活をしのばせる道具類や空間 (ロバが牽いた大きな石臼や台所など) がそのまま保存されていて興味深い。

したがってパラジャネッロには洞窟教会も多く、本センター発行の『研究調査レポート 2011 年度』に収録した「隠修士聖ヒエロニムス (ジェロラモ)」の壁画が残る洞窟教会サン・ジェロラモ教会 (No.34) や「聖ゲオルギウス」の壁画が残るサンタンドレア教会 (No.33) も同地であることを思い出したい。『研究調査レポート』にも写真を付して特筆したように、北の外れの峡谷沿いにあるサンタンドレア教会は、周囲の凝灰岩を建築用石材として無分別に切り出してしまったため、現在では当時とはまったく別の姿 (高さ 10m の城壁の塔) となっている。また、同じ『研究調査レポート』に収録してあるサンタ・ルチア教会 (No.35) もまたパラジャネッロで、それは峡谷の対岸、西側の斜面にある。

3.2 建築に対する考察

パラジャネッロ峡谷は市街地の西側を北から南へ向かって走っているが、サン・ニコラ教会は市街地から南へ約 700m 離れたガッレオーネ農園近く、峡谷の東側に位置する。とはいえ、教会に至る現在のルートとしては、干上がって石ころがゴロゴロした峡谷の谷底を横切り、対岸の斜面を上るほかない。あたりはアーモンドやイチジク、ブドウなどの果樹が植えられているが、サン・ニコラ教会が教会として機能していた時代には、

凝灰岩の段丘がむき出しになっており、現在の教会入口 (Fig.40) のずっと手前から教会へ続く道があったと思われる。

『研究調査レポート 2011 年度』(No.36) にも掲載したサン・ニコラ教会平面図の出典は 1998 年にバーリで刊行された『プーリア・バジリカータ州の洞窟教会』¹⁵ によるものであるが、おそらくは 1980 年にフィレンツェで刊行されたロベルト・カブラーラ (Roberto Caprara) の『パラジャネッロ洞窟文化圏』(第 1 巻 教会篇)¹⁶ 所収の図面 (Fig.41) を単純化したものではないかと思われる。いずれにせよ、同書に掲載されている図面と本センターが今年度実施した 3D スキャンによる平面図 (水平に切る断面の位置によって多少変化する) を比較すると、入口付近の状況と東壁面の角度 (約 15 度の差) でかなりの違いがある (Fig.42)。

入口付近の状況変化の原因について、筆者は段丘を形成する凝灰岩の崩落による土砂の堆積やその後に設置された (現在の鉄パイプ製以前の) 石積み階段の崩れなどによるものと考えている。前掲の『研究調査レポート』にも書いたように、現在の入口は鉄パイプを組んだ応急的な 15 段の階段から下に下りる。

(Fig.43) 天井が岩盤で覆われているのは下から 7 段目あたりまでで、そのために右 (南) 壁に描かれていた壁画「玉座のキリスト」の 2/3 は雨ざらし日晒しで、ほとんど消失しかかっている状態である。13 世紀に建設された当初の入口は、現在の仮設階段の始まるもつと手前 3-4m にあり、10 段ほどの階段を床面まで下りた地点から (右側の壁面に) 「玉座のキリスト」が描かれていたはずである。しかし、いつの時代かわからないが、おそらくは天井の岩盤の厚さを充分に取らなかつたせい、あるいは岩盤自体の「もろさ」や亀裂などの原因で、階段上部の天井の崩落が起こった。その結果、入口そのものが奥 (東) に移動した形にはなったが、少し急勾配に石を積んで新たな階段をこしらえることで何とか室内への導線を確認したのだろう。ロベルト・カブラーラが調査した時は、このような状態であったと思われるが、その時点ではまだ当初の姿を図面にすることができた。その後、さらに応急階段として積まれたブロック石材も流入してくる土砂や植物 (イチジクやブドウ) の根によって崩れ、壁画「玉座のキリスト」前の床に積み上がってしまった (Fig.44)。現在の仮設階段は、その上に固定されたわけである。最初の崩落のあと、外の教会入口周辺は段丘の上方から崩れ落ちてきた岩塊や土砂が堆積し、地表レベルは上がり、当然ながら堆積は時代とともに厚みを増していった。本来は岩盤の段丘レベルであった教会入口周辺には腐葉土などが堆積し、(中には近隣の農民によって植えられたものもあるかもしれない) イチジクやブドウ、アーモンドなどの植物が根を張って成長し、ますます教会入口付近や室内を形成している岩盤そのものを崩していったのではないだろうか。なお、現在の入口上部、ちょうど「玉座のキリスト」が描かれた壁画のキリストの頭上に位置する垂直の崖面に浅く彫り込んだ半円アーチ (およそ幅 130×高さ 70cm) の窪み (ルネッタ) をみることができるが、筆者は、これは当初からのものではなく、旧入口前部が崩落したあとに彫られたものだと考えている。

教会に入るといふより、穴の底に下りるといふ表現がびつりの室内は、柱のない方形プランをもつ小さな空間で、入口となっている西側以外の3方の壁面には壁龕が設けられており、東側の壁龕を後陣としている (Fig.45)。後陣の削り型中央には凝灰岩を掘り残して作られた祭壇が設けられていたが、ほぼ完全に削り取られている。東側の後陣と同規模ないしはそれ以上の大きな (半円形アーチの) 壁龕は、南壁面 (Fig.43) と北壁面 (Fig.46) にも存在する。また、後陣の左側、聖ペテロの立像のすぐ左には小さな半月形の壁龕が掘られている (Fig.45)。同様な小壁龕は、北側に1つ、南側に2つ (内1つは大きな壁龕の中) にもある。ロベルト・カプラーラの前掲書の立面図 (Fig.41) には北側の壁面に2つの小壁龕の存在が示されているが、不思議なことに現状では発見できない。

おそらくサン・ニコラ教会は (後陣の祭壇前の地下から男性の遺骨が発見されていることから) 埋葬のための私的礼拝堂として建設され、やがて教会として使われるようになったのではないかと推測されるが、いつの頃から教会は閉鎖され、人々の記憶から忘れ去られた。1879年11月に洞窟教会は再発見されたのだが、(驚くべきことに) そのわずか数ヶ月後には近隣の農民たちによって勝手な「宝探し」が行われ、床下1mまで掘り返された。その時にヴェネツィアの金貨1枚と銀貨52枚が発見され、それらの通用期間である1311年~1444年が特定されたのである。¹⁷

3.3 建築に対する考察

壁龕内ばかりでなく壁面にも、12世紀末から14世紀末に描かれた質の高い壁画が残っている。制作年代はすべて先行研究であるロベルト・カプラーラ Roberto Caprara の前掲書に従った。

【東側後陣】

東側に設けられた後陣としての壁龕内には「デエシス」 (Fig.47) が描かれ、中央に「パントクラトールのキリスト」、(向かって) 左に「聖母マリア」、右に「聖ニコラウス」が描かれている。

「デエシス (deisis ギリシア語でデイシス)」とは「請願」「祈願」を意味するギリシア語で、中央のキリストに対する代願者として、向かって左に聖母マリア、右に洗礼者聖ヨハネを配し、立像の場合、代願者の2人は少し頭を垂れ、手を延べてキリストに罪の赦しを乞う姿で描かれるのが一般的であるが、ここでは洗礼者聖ヨハネではなく司教服を着た「聖ニコラウス」が描かれている。こうした図像学的特徴のために、この教会は「聖ニコラウス (サン・ニコラ)」に捧げられた教会 (サン・ニコラ教会) と呼ばれてきた。

後陣の円周部分は外側が赤色、内側がオーカー色の2色からなる枠線で囲まれ、背景は祭壇上部のラインで上下2段に色分けされていた。上半分が青色で下半分が地上を表すオーカー色。「パントクラトールのキリスト」は正面向きの半身像で、赤いチュニカに背景と同じ青いマントをはおる。十字装飾のある大きな円光は特徴的なデザインである (Fig.48)。肘を曲げて肩の位置に掲げられた右手は人々にラテン式の祝福を与えている。左手には『黙示録』の一文「我はこの世の始めであり終わりである」"EGO SVMA W PRIMVS"(1:8)を記した聖書を持つ。キリ

ストの頭部 (顔と円光部分) はおそらく描き直しの手が入っているであろう。制作年代は12世紀末から13世紀初めにかけてで、14世紀に加筆されていると思われる。キリストの両脇に聖母マリアと聖ニコラウスの立像が描かれているが、2人もキリストと堂内で祈る礼拝者の間を取り持つべく、斜めを向いて立っている。

向かって左側には、両腕を曲げて手をキリストに差し伸べる立像の「聖母マリア」。背景と同じような青い衣服にキリストのチュニカの赤よりも緋色に近いマントをはおっている。オーカー色のシンプルな円光には白い輪郭線のみが描かれている (Fig.49)。制作年代は、パントクラトールのキリスト」と同じ12世紀末から13世紀初めにかけてである。

向かって右手に描かれた司教服姿 (胸元がY字型のカズラ) の「聖ニコラウス」には顔の前に書かれた"NIKOLAVS"のラテン語が読み取れる (Fig.50)。円光はキリストのものと同じデザインである。制作年代は12世紀末から13世紀初めにかけてで、おそらくは14世紀に加筆されている。

今回の調査では、「聖ニコラウス」像の下方に、石灰クリームがしたたるように幾筋も岩肌を伝って流れた跡を発見した (Fig.51)。ただし、左側の「聖母マリア」像の下には、そのような痕跡はまったく見られない。推測ではあるが、それは「聖ニコラウス」像を描く際に、ゆるい石灰クリームを壁面に塗ったために、これほどまでに流れてしまったのではなかったか。斜光線照射による壁面調査でも漆喰の継ぎ目は発見できなかったので、上塗り漆喰 (イントーナコ) を塗り継いで描いたブオン・フレスコ画法で制作されたのではないことは確かである。もちろん、時代的にもブオン・フレスコ画法の時代には1世紀ほど早いのだが、ブオン・フレスコ画法誕生前の「石灰画」(pittura a calce)として位置づけてみたら、テンペラ画としてのセッコ画法からブオン・フレスコ画法への過渡期が上手く説明できるのではないかと考える。

ブオン・フレスコ画の技法が確立される以前は、塗られる漆喰は1層で、下塗り漆喰 (アツリッチョ) の層は (漆喰の保湿時間を長くする必要はなかったから) 基本的には必要なかった。漆喰壁に彩色するにあたって、顔料に接着剤 (媒材) としての膠やカゼイン、卵黄などを用いたであろうが、漆喰 (石灰) そのものの接着力ないしは固着力については古くから広く知られていた。ただ、石灰クリームは基本的な白色絵具であったから、媒材として使えば、絵具の色は白を混ぜたと同じことになってしまうわけである。そこで他の媒材を顔料に混ぜたかどうかはともかく、絵具の漆喰壁面に対する固着力を強めるために、漆喰壁の上に石灰クリームを一塗りし、水分が下の漆喰層にある程度吸収された頃を見計らって彩色すれば、描画層はいつそう強く漆喰壁面と一体化したはずである。もちろん、「石灰クリームの水分が下の漆喰層にある程度吸収された頃」を見計らうには経験が必要であったが、石灰クリームの水分が吸収され尽くして再び壁面が乾いてしまっても、また上から石灰クリームを薄く塗ればよいという点では融通が利きそうである。

今後、学内の壁面で実験を繰り返してみなければならぬが、洞窟教会の壁面は吸水性の高い凝灰岩であり、それがアツリッチョの役割を果たしたとすれば、漆喰が1層しか塗られなかつ

たとしても、石灰クリーム乾燥は相当に遅らせられたのではないかとも思える。また、「パントクラトールのキリスト」の右腕の付け根あたりには、手指で壁面をなでつけたような痕跡があり、筆のほかに手指で石灰クリームをのぼし広げたようにも思える (Fig.52)。いずれにしても、ブオン・フレスコ画法のルーツを求めるといふ点では、その原点とも言える「石灰画」についての知見を深める必要があり、今後の研究に1つの方向性が示された。

【東側:後陣の(向かって)左壁面】

後陣の(向かって)左壁面に描かれている立像の「聖ペテロ」にも両肩のあたりに"SCS" "PETRVS"の名が白文字で記されており (Fig.53)、それは聖人が左手に下げている2つの鍵という図像学的特徴からも聖ペテロに合致する。背景は水平に青・黄・青の3段階に区切られている。2本線組の枠は外側が赤で内側が黄、2本線の境界と枠取りの内側には細い白線が引かれている。(ただし、2本線組の枠は上半分の青色背景の部分までで、そこから下は赤色だけの枠となる。)「聖ペテロ」は正面向きの立像で、右手には先端部に白い十字架のついた細身の棒(杖)を握り、左手で2つの鍵を下げている。袖のある青いチュニカに赤いマントをはおり、髪は縮れて濃く、髪や髯には白色でハイライトがつけてある。オーカー色の円光は赤い唐草模様で飾られ、さらに白色でハイライト(?)がつけられている。サンダルを履いている両足は少し前後に開かれ、左足先は赤い枠線からはみ出している。制作年代は13世紀中頃で、顔と円光はおそらく14世紀の初めに加筆されている。

【南側壁龕】

南側の壁龕内の左半分に描かれている「聖マッテヤ」も、聖人の右肩のラインに沿って青地に"S MATHIAS" (聖マッテヤ)と白い文字で記されているので明らかである (Fig.54)。枠線は壁龕の左側のアーチに沿った部分は、外側が赤で内側が巾広に塗られた黄色、そしてアーチを閉じる右側の垂直な線は赤色のみの枠線である。「聖マッテヤ」は正面向きの立像で、右手は胸のあたりで、「パントクラトールのキリスト」と同じラテン式の祝福を与えている。左手は軽く前の方で曲げられ、おそらく灰色のチュニカの上に羽織っている赤いマントを握っているのではないかと思われる。カプラーラの前掲書ではサンダルを履いていると記されているが、剥落が進んだ現状では定かにはわからない。オーカー色の円光は、濃い褐色の輪郭が引かれているだけで、円内に装飾はない。灰色の髪、長く伸ばした顎髭が特徴的な聖マッテヤは、階段を下りて教会堂内に入ってきた者に優しい視線を向けて、祝福を与えているかのようである。制作年代は、同じく12世紀末から13世紀初めであろう。

【南側:壁龕(に向かって)右壁面】

南側壁の壁龕のさらに右には、14世紀末頃の壁画と推測される「玉座のキリスト」が大きく描かれていたが、教会入口付近の崩落によって壁画面が露出してしまったため、現在では玉座の左端と赤いマントの一部が認められるのみで、威厳あるキリストの姿は失われてしまった (Fig.55)。手元にある、年代の異なる3人の先行研究で、この「玉座のキリスト」がどのように記述されているかを比較すれば、時代の流れとともに壁画の損傷が大きくなって消失していく様子が明らかとなるであろう。

①1913年出版のM.ルーポの著書¹⁸では、「そこにはビザンティン様式のもう1つの壁画があり、それは円形の背もたれのある玉座に座る若いキリスト像である。刺繍が施された赤い大きなマントをはおっている。キリストの後ろには、2人の大天使が座り、彼らの足下はすばらしいマントですっぽりと包まれている。グレーの服を着た貧相な男がひざまずいている。」¹⁹と、記述はかなり具体的である。

②1939年出版のA.メデア²⁰の著書では、「入口右手にもう1つキリストが描かれた壁画がある。それは十字架のついた円光があり、背景は水色である。黒っぽい線で輪郭が縁どられた姿は厳かで威厳に満ちている。」²¹と、具体性を欠いた記述になっている。

③1980年出版のロベルト・カプラーラの前掲書²²では、「保存状況は最悪である。玉座の左側の断片と、その横に立ち並ぶ2人の天使の円光の断片が残っているだけである。サイズは、高さ200cm×幅150cm。」²³と、ほとんど筆者らが目にしている現状と変わらない。

このような経過をたどって、壁画としての「玉座のキリスト」はほとんど消失してしまったわけだが、今回の調査によって、残された断片的部分から、さまざまな壁画技法を読み取ることができた。たとえば、枠線などの垂直水平の直線を引くために用いた墨縄の「押しつけられた縄目(より糸)」が見えるが、壁面に微妙な縄(糸)目が痕跡として残るためには、壁面に塗られた漆喰がまだ完全には乾燥硬化していない時期であったことがわかる。ただし、墨縄と言っても、シノピアなどの赤色絵具に浸した縄(糸)をはじけば、多かれ少なかれ壁面には絵具のしぶき跡が見られるのがふつうであるが、それがまったく見られないというのは、色を浸ませた縄(糸)をはじくのではなく、強く張った縄(糸)を生乾きの漆喰に押し当てたのではなかったかと思われる。

【北側壁面】

北側壁面 (Fig.46)には壁画の痕跡は見られず、先行研究でも北側壁面に壁画が描かれていたことを示唆するものはないが、東側の後陣よりも(わずかではあるが)大きな切り型壁龕の存在と、壁龕内の壁面がかなり平滑に整えられていることを考えれば、そこに壁画が描かれていた可能性をすぐに否定することもできない。この最大級の壁龕が掘り抜かれた時点では、たとえば廟墓が設置されるなど、大きな意味が与えられるはずであったと考える。その場合でも、背面壁の平滑な仕上げからして、必ず壁画装飾することを前提としていたであろう。

3.4 新発見の手紙資料

監督官 P.ドメニコ・ルドヴィコ・デ・ヴィンチェンティス (L'ispettore P. Dom.co Ludovico De Vincentis) がターラント周辺地域の管理者 Prefetto del Circondario di Taranto に宛てた1879年11月27日付の手紙(手書き)があるが、これはサン・ニコラ教会発見時の様子がわかる唯一の資料である。筆者らの地元協力者であるドメニコ・カラニャーノ氏 (Domenico Caragnano:パラジャネッロ歴史民俗博物館長)自身が、それを読みやすくタイピングしてくれたので、以下にそのまま掲載する。(Fig.56)

3.5 壁画保存の状況

教会入口付近の崩落により、低い洞窟内には雨が流れ込むなど、きわめて劣悪な環境にもかかわらず、壁画の彩色は比較的よく残っている。洞窟教会の床面は常に湿気っており、壁面下部には苔やカビなどの繁殖がひどい。ことに危惧されるのは、階段わきの南壁面に描かれた「玉座のキリスト」で、完全に露出しているため、常に雨や強い陽光の影響を受けて右半分はすでに消失してしまった。

註

1. Francesco Di Palo e Simone Mirto, “Sacralità Domestica”, Claudio Grenzi Ed., Foggia, 2012, pp.5-7
2. Aurelio Marangella e Mario Parise, “La Gravina di Riggio (Grottaglie,Ta)”, Atti del 45° Corso CNSS-SSI di III livello di “Geomorfologia Carsica”, Grottaglie Castello Episcopio 2-3 febbraio 2008, p.123
3. M. Peluso e P. Pierri, “Cripte e affreschi nell’ agro di Grottaglie”, Manduria, 1981 では峡谷の東側の教会を Chiesa Maggiore (Chiesa del Salvatore), 西側の教会を chiesa minore としている。Aurelio Marangella e Mario Parise, “La Gravina di Riggio (Grottaglie,TA)”, Atti del 45° Corso CNSS-SSI di III livello di “Geomorfologia Carsica”, Grottaglie Castello Episcopio 2-3 febbraio 2008, p.125 では、峡谷の東側の教会を Cripta Maggiore (Chiesa rupestre del Salvatore), 西側の教会を Cripta Minore dei SS.Biagio e Simeone としている。また, Franco dell’ Aquila e Aldo Messina, “Le Chiese Rupestri di Puglia e Basilicata”, Mario Adda Ed., Bari, 1998, p.170 では峡谷の東側の教会を Gravina di Riggio, chiesa I (S.Salvatore?), 西側の教会を Gravina di Riggio, Chiesa II としている。
4. Catalogo ICCD Itinerari culturali del medioevo pugliese
5. Angelofabio Attolico e Maristella Miceli, “Un edificio di culto di età bizantina in agro di Grottaglie (Ta): alcune note sulla Chiesa Maggiore della gravina di Riggio”, “L’habitat rupestre nell’ Area Mediterranea”, Giornate Internazionale di studio in Terra Jonica, Massafra, Palagianello 29-30-31- ottobre 2010, p.28
6. Angelofabio Attolico e Maristella Miceli, op.cit. (n-5) pp.30-32
7. Arcangelo Fornaro, “Elenco Beni Archeologici”, Piano Urbanistico Territoriale Tematico / Paesaggio, Area Tecnica – Settore Urbanistica Citta di Grottaglie, Grottaglie, 2007, pp.3-4
8. C.Cafforio, “Riggio, Casale disabitato nel territorio di Grottaglie”, Taranto, 1961, pp.41-48
9. M. Peluso e P. Pierri, “Cripte e affreschi nell’agro di Grottaglie”, Manduria, 1981, pp.34-40
10. P. Parenzan, “Le chiese rupestri La gravina di Riggio”, Fasano, 1995,pp.69-84
11. Arcangelo Fornaro, op.cit. (n-7) p.4
12. Arcangelo Fornaro, op.cit. (n-7) p.4
13. Angelofabio Attolico e Maristella Miceli, op.cit. (n-5) p.31
14. 祝福にはラテン式(親指と人差し指と中指の3本をのばし、薬指と小指を掌の方へ曲げる。ときに親指を曲げて薬指と接す

ることがある)とギリシア式(小指も伸ばす)がある。

15. Franco dell’Aquila e Aldo Messina, “Le Chiese Rupestri di Puglia e Basilicata”, Mario Adda Ed., Bari, 1998
16. Roberto Caprara, “L’insediamento rupestre di palagianello”, vol.1 Le Chiese, Tipografia Il David, Firenze, 1980
17. Roberto Caprara, op.cit. (n-16) p.20
- 18.M. Lupo, “Palagianello e le sue cripte, Note storiche e archeologiche”, Mottola, 1913, p.18
19. «...vi è un altro affresco,che rappresenta G.Cr., dipinto alla foggia bizantina, il quale è seduto sopra un trono con spalliera circolare. Veste un grande mantello rosso ricamato. Dietro a G.Cr. sono seduti due Arcangeli, ed ai loro piedi, r avvolto nel mantello divino, è inginocchiato un omicciattolo, che indossa abito grigio »
- 20.A. Medea, “Gli affreschi delle chiese eremitiche pugliesi”, 2 Vol., Roma p.228
21. «Il Cristo appare in un altro affresco a destra dell’ ingresso su fondo azzurro, ha nimbo crucifero, I tratti di contorno sono scuri, la figura è solenne e maestosa » .
22. Roberto Caprara, op.cit. (n-15) p.29
- 23.Pessima conservazione. Residuano solo frammenti pertinenti alla parte sinistra del trono e le aureole dei due angeli che lo fiancheggiavano.
Dimensioni: h.cm. 200 ca.; l.cm. 150 ca.

参考文献

- [1] Francesco Di Palo e Simone Mirto, “Sacralità Domestica”, Claudio Grenzi Ed., Foggia, 2012, pp.5-7
- [2] Catalogo ICCD Itinerari culturali del medioevo pugliese
- [3] Angelofabio Attolico e Maristella Miceli, “Un edificio di culto di età bizantina in agro di Grottaglie (Ta): alcune note sulla Chiesa Maggiore della gravina di Riggio”, “L’habitat rupestre nell’ Area Mediterranea”, Giornate Internazionale di studio in Terra Jonica, Massafra, Palagianello 29-30-31- ottobre 2010, pp.27-34
- [4] Arcangelo Fornaro, “Elenco Beni Archeologici”, Piano Urbanistico Territoriale Tematico / Paesaggio, Area Tecnica – Settore Urbanistica Citta di Grottaglie, Grottaglie, 2007, pp.3-4
- [5] Franco dell’Aquila e Aldo Messina, “Le Chiese Rupestri di Puglia e Basilicata”, Mario Adda Ed., Bari, 1998
- [6] Aurelio Marangella e Mario Parise, “La Gravina di Riggio (Grottaglie,Ta)”, Atti del 45° Corso CNSS-SSI di III livello di “Geomorfologia Carsica”, Grottaglie Castello Episcopio 2-3 febbraio 2008
- [7] Roberto Caprara, “Società ed economia nei villaggi rupestri”, Schena Ed., Fasano(Br), 2001
- [8] Roberto Caprara, “L’insediamento rupestre di palagianello”, vol.1 Le Chiese, Tipografia Il David, Firenze, 1980

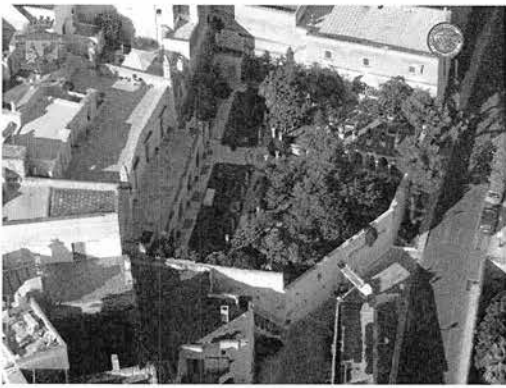


Fig.1

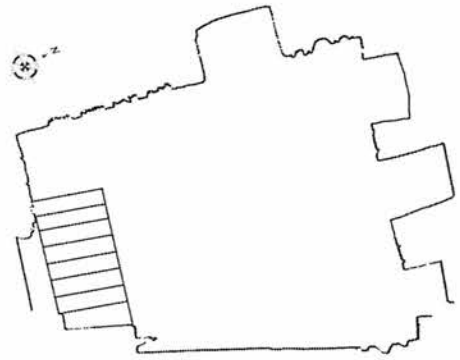


Fig.6



Fig.2



Fig.7



Fig.3



Fig.8



Fig.4



Fig.5



Fig.9



Fig.10

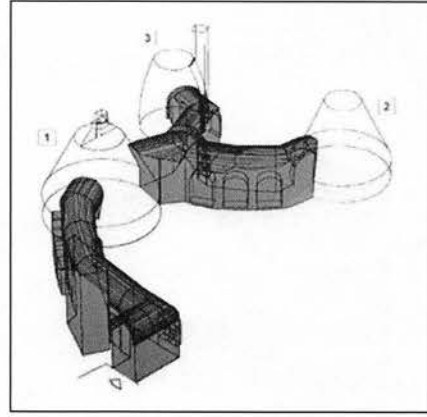


Fig.11



Fig.12

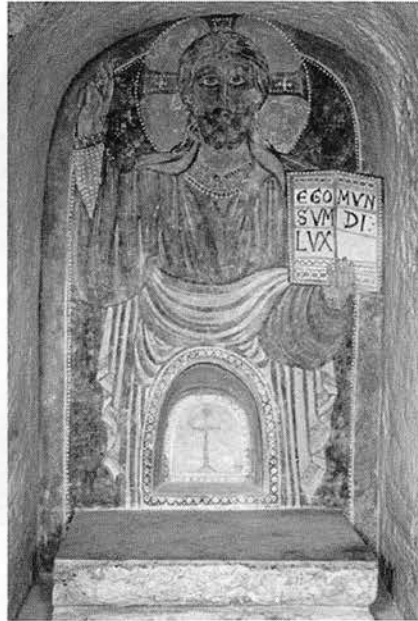


Fig.13

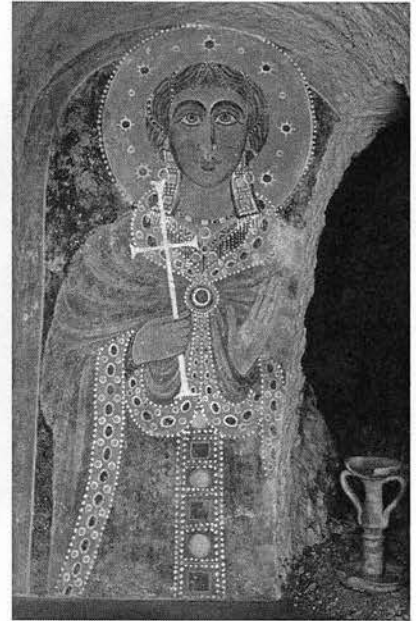


Fig.14



Fig.15



Fig.16



Fig.17

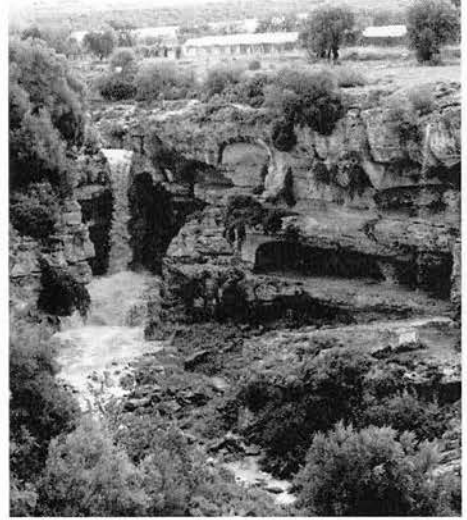


Fig.18



Fig.19

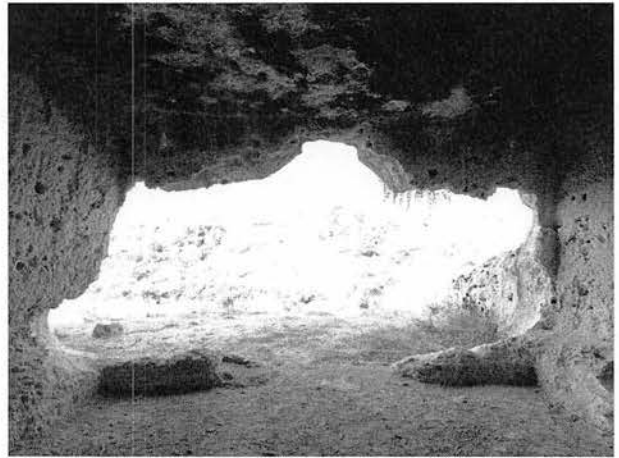


Fig.20

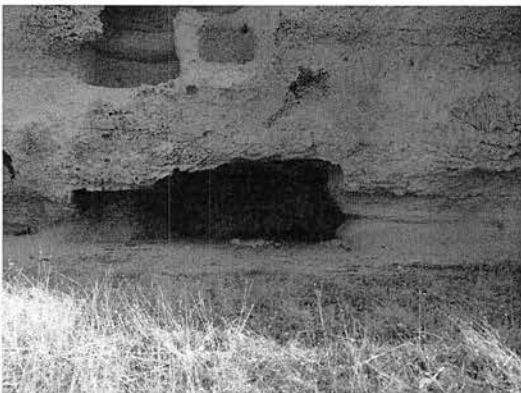


Fig.21



Fig.22



Fig.23



Fig.24



Fig.25

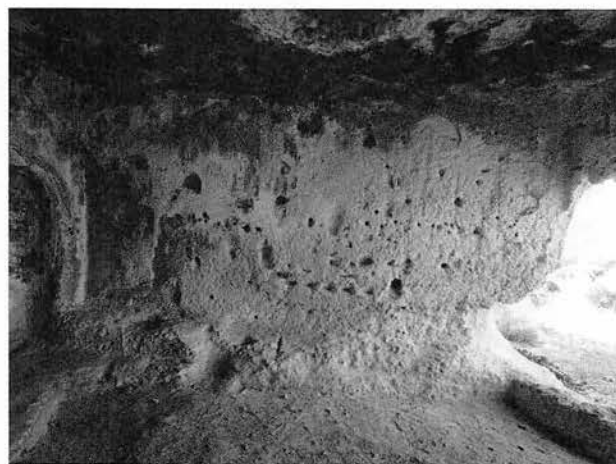


Fig.26



Fig.27

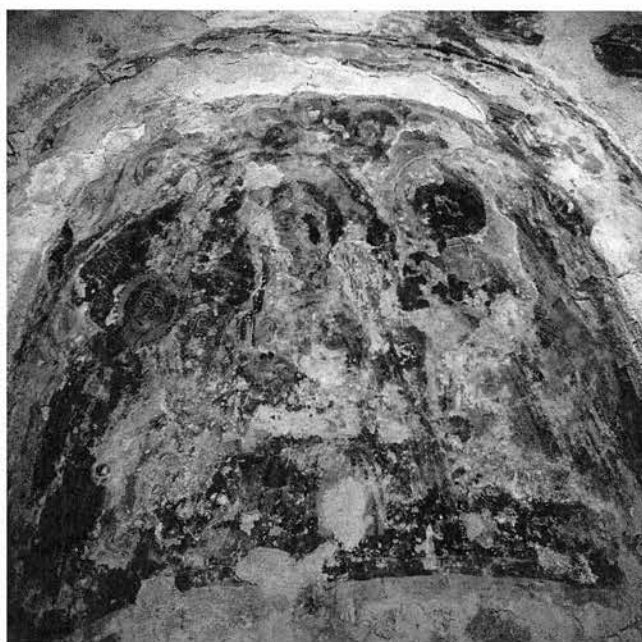


Fig.28



Fig.29



Fig.30



Fig.31

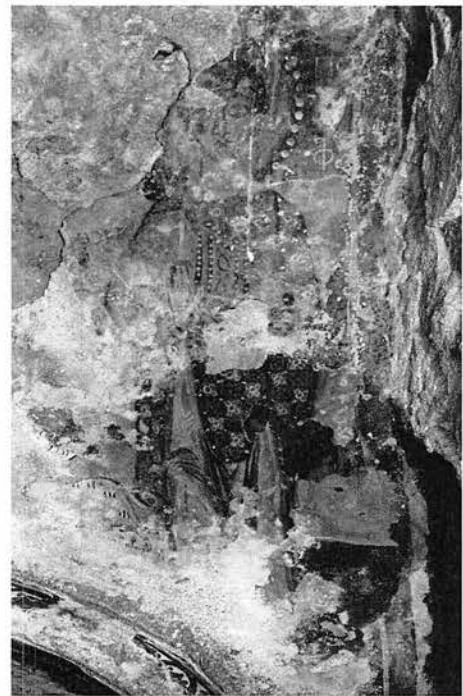


Fig.32



Fig.33



Fig.34



Fig.35



Fig.36

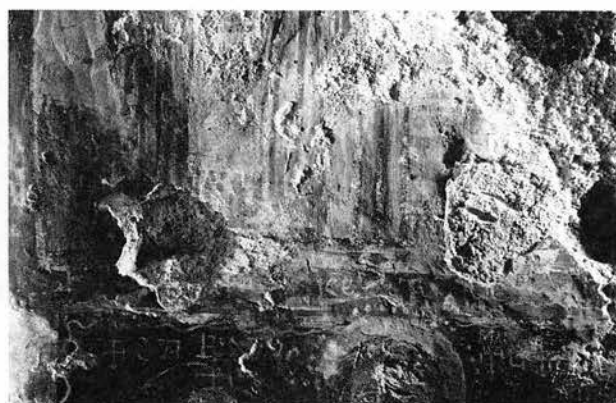


Fig.37

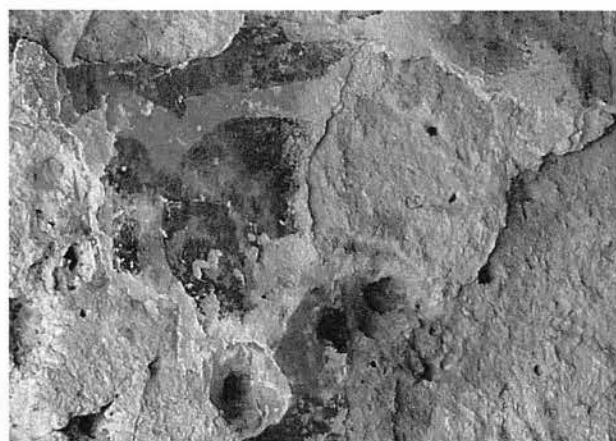


Fig.38



Fig.39



Fig.40

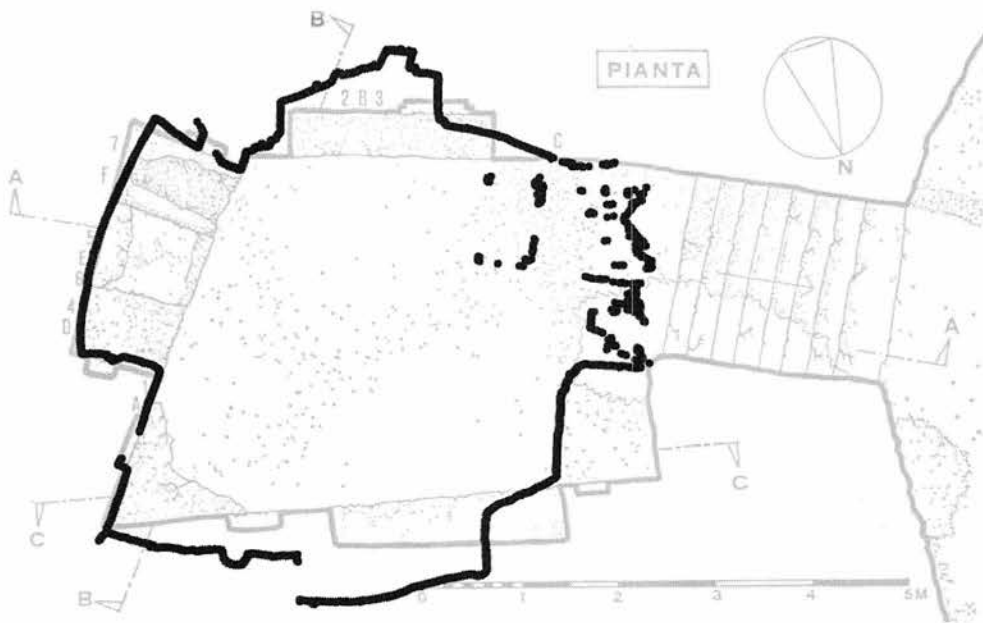
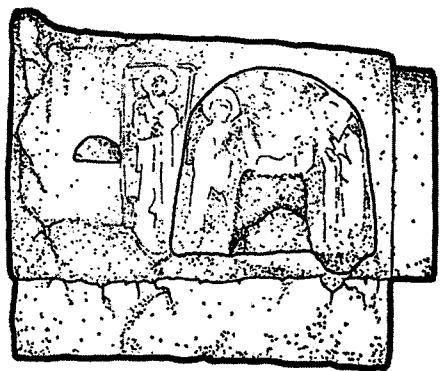
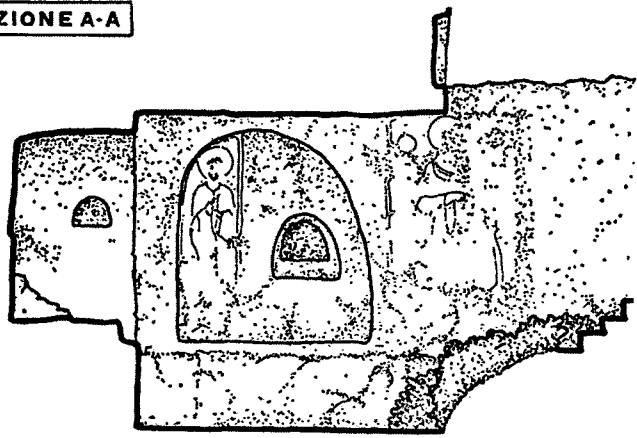
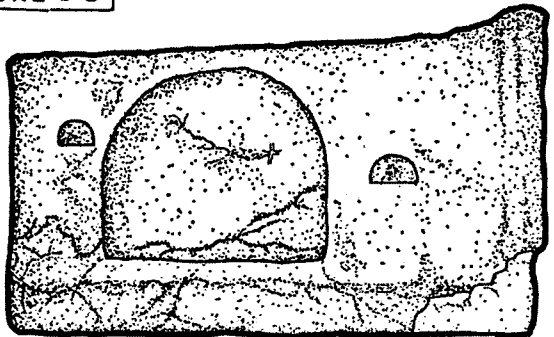


Fig.42

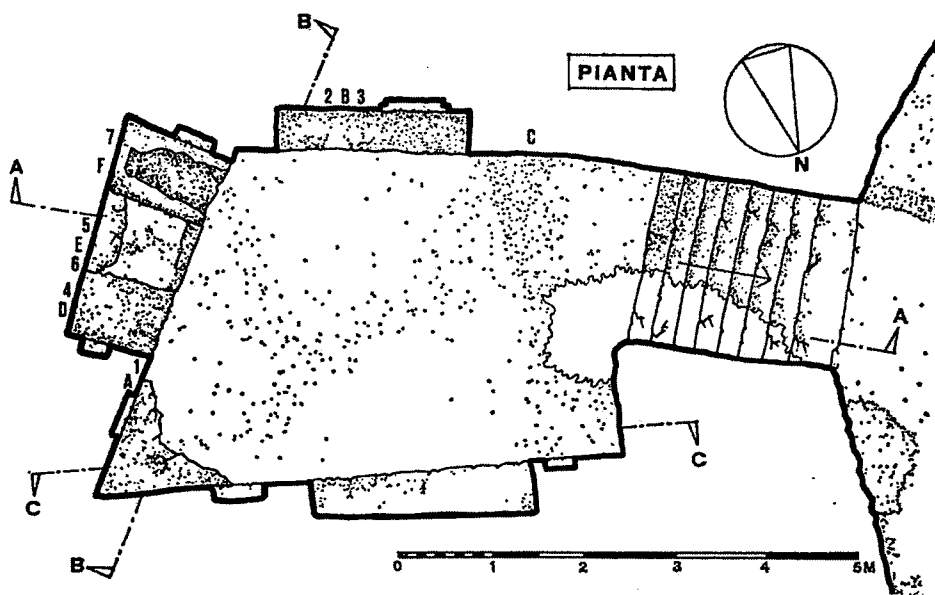
SEZIONE A-A



SEZIONE C-C



SEZIONE B-B



TAV. IV. San Nicola. Pianta e sezioni. Con le lettere sono indicati gli affreschi; con i numeri le iscrizioni.

Fig.41



Fig.43



Fig.47



Fig.44



Fig.48



Fig.45



Fig.49



Fig.46



Fig.50



Fig.51



Fig.52

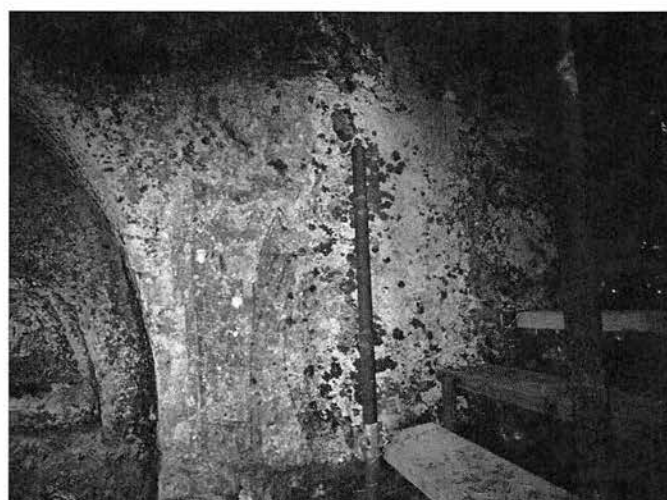


Fig.55



Fig.53



Fig.54

Taranto, li 27 Novembre 1879

Ill.mo

Sig. Sotto Prefetto del Circondario di
Taranto.

In esecuzione degli ordini della S.V. Ill.ma comunicatimi con Nota del 19 and. N. 1103 le partecipo che essendo andato lunedì p.r. 24 and. in Palagianello, mossi in compagnia del Sig. Sindaco di Palagiano sul luogo a verificare quanto era stato indicato dal rapporto di quel Parroco, e si rinvenne la Chiesa in parola che era stata murata per cura del sullodato Sindaco all'apertura.

Disfattasi la muratura fui sollecito misurare le dimensioni nella lunghezza di m. 6,18, larga m. 4,72 alta m. 2,32. In un grand'arco di fronte alto m. 2,26, largo m. 2,00 della grossezza di cent. 94 eravi in fondo, di prospetto all'entrata, un affresco con tre figure di santi cioè S. Nicola di Mira nel mezzo a due altri ai lati. In quella di mezzo eravi questa scritta

Eb - o
SU - M
P - ω
PP. I
MU S

A fianco dell'arco maggiore a destra un altro affresco rappresentante l'Apostolo S. Pietro con la scritta

PE
TRUS

Alla facciata a destra dell'entrata un altro arco minore del primo con affresco rosso in gran parte sembra essere effigie di S. Paolo, a lato del quale sonvo 3 iniziali I.C.S. ed altro in ordine verticale S.M.A.T.I.I.R.S.. Nel mezzo dell'arco maggiore è sito un altare in forma di genuflesso rio alto Cent. 90, largo 90, grosso 50. - Sotto l'altare alla profondità di cm. 45 era scavato nel sasso un sepolcro, donde si erano estratte poche ossa verificate da un professore di Medicina, furon dichiarate di sesso maschile, sotto delle quali il contadino, cui il luogo era stato concesso come quota demaniale comunale a nome di Angelo Galeone di Donato, dichiarò avere rinvenuto 82 monete d'argento ed una di oro, le une delle dimensioni di un centesimo al due, l'altra del due centesimi al soldo: che quella di oro era piuttosto una medaglia che una moneta poiché aveva l'istessa effigie di S. Nicola. Avendo richiesto al med.mo le monete disse averne 6 d'argento e quella di oro il Prof. Masella Medico del luogo, e 76 suo cognato Bart. Giannota. Trovandosi questi detentorio sul luogo stesso ov'erasi assemblata molta gente del villeggio, feci indender loro di consegnare al Sindaco tutte le monete che le avrebbe suggellate in loro presenza e rilasciatone ricevo, sino a che il R. Ministero avesse disposto dell'uso a farsene, colla promessa che sarebbero stati rivalsi dell'equivalente dietro valutazione se così piacesse a S. E. il Ministro, e ne ottenni promessa in pubblico. Disposi inoltre che il Sig. Sindaco dovesse scrivere all'Ordinario Vescovo Diocesano per la tumulazione delle ossa trovate in luogo sacro, e nel contempi le feci porre in deposito nel Cimitero. Curai inoltre che si rifabbricasse l'apertura per custodia.

Tanto dovea in esecuzione del mio incarico, con la preghiera ch'Ella si degli darne comunicazione all.mo Prefetto avendo io con questa data fatto minuta descrizione a S. E. Ministro della Pubblica Istruzione, e per esso al Direttore Generale degli Scavi e Monumenti.

Debbo da ultimo significare alla S.V. le gentilezze usatemi dal Sig. Sindaco di Palagiano.

L'Ispettore

P. Dom.co Ludovico De Vincentis

Fig.56



ヴェスティータ家の教会 グロッターリエ



庭園



教会入り口



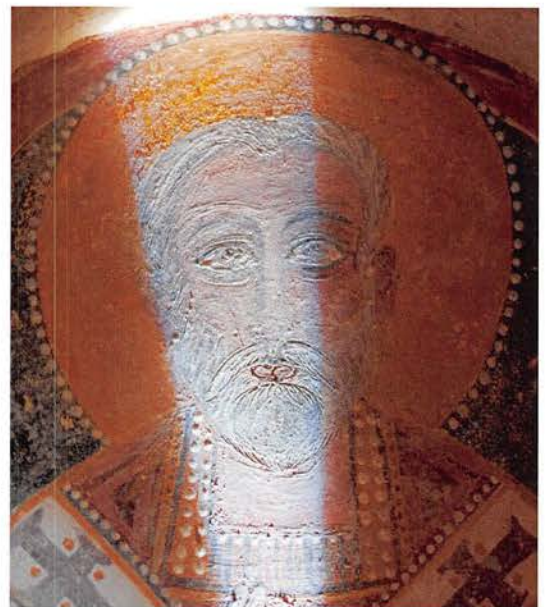
パントクラトールのキリスト



聖女バルバラ



聖ニコラウス



斜光線照射



グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会 東側の後陣



グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会



祈りの聖母マリアと4聖人



祈りの聖母マリア



デエシス(壁画に斜光線を照写)



リッジョ峡谷



峡谷の下からグラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会を臨む



洞窟教会のファサードに咲くケッパーの花



パラジャネッロ峡谷



サン・ニコラ教会 東側後陣



聖ニコラウス



石灰クリーム of 痕跡